

## 小中一貫教育支援：芸術家を活用したダンスの授業づくり

高橋るみ子 福島裕子\* 中倉信博\*\* 野邊麻衣子\*\*  
外蘭武志\*\*\* 児玉孝文\*\*\*\* 豊福彬文\*\*\*\*

Support of Educational Continuity From Primary Through  
Early Secondary Levels: Make the Classes of the Dance that Utilized the Artist

Rumiko TAKAHASHI Hiroko FUKUSHIMA  
Nobuhiro CHUKURA Maiko NOBE Takeshi HOKAZONO  
Takafumi KODAMA Akifumi TOYOFUKU

### 1 研究の目的

これまで、中学校の「ダンス」は「武道」との選択であった。したがって、小学校の教師は、小学校のダンスのことだけを考えればよかった。しかし、今回の学習指導要領の改訂で、「武道」と共に中学校の「ダンス」が必修となった。これからは、小学校の教師も、小学校の「表現リズム遊び」や「表現運動」のことだけではなく、中学校の「ダンス」との接続についても考えなければならなくなった。

ただし、小学校の「表現運動」という積み木の上に中学校の「ダンス」という積み木を乗せただけでは、「円滑な接続」は難しい。「表現運動」と「ダンス」をつなぐ背骨がなければ、乗せた積み木はぐらつくであろう<sup>1</sup>。そう考えると、今、小学校の「表現運動」と中学校の「ダンス」との「円滑な接続」に求められるものは、子どもたちのダンス教育9年間を貫く「背骨」と言うことになるであろう。「背骨」の候補は一つとは限らない。何をどう設定していくか。社会が変化しても変わらない、ダンス教育を貫く太い「背骨」を探したいものである。

また今年度、宮崎大学教育文化学部附属小学校（以下「附属小」という。）と同附属中学校（以下、「附属中」という。）が、両校揃って文部科学省の新事業である「児童生徒のためのコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験（以下、「新事業」という。）の開催校に採択された。また、その実施にあたり、大学が、附属小及び附属中の教師と招聘する芸術家のコーディネーター業務を担当することになった。（公立学校の場合は、地域の教育委員会やNPO法人・劇団等が担当する業務である）。

文部科学省の新事業の開催は、附属小及び附属中の児童生徒のダンス学習の充実を図るための好機である。そこで、本研究は、「コミュニケーション教育」を、附属幼稚園から附中までの12年間のダンス学習を貫く「背骨」に見立てた実践研究を行い、「小中一貫教育支援」の観点から、新事業の効果（児童・生徒及び教師、学校）を明らかにし、コミュニケーション能力

\*宮崎大学教育文化学部附属幼稚園  
\*\*\*宮崎大学教育文化学部附属中学校

\*\*宮崎大学教育文化学部附属小学校  
\*\*\*\*非営利法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER

の育成に資するダンス学習の成果と課題について考察・報告する。

## 2 研究の方法

### 2-1 研究の背景

幼稚園からに高等学校を通じた一貫性や系統性が求められて10余年が経過した<sup>2)</sup>。この間、筆者らも、舞踊学研究室を中心に、附属幼稚園と附属小とのスムーズな接続を図ることを目的に、新教科「表現科」の可能性を探った教育実験<sup>3)</sup>や、附属中までを見通した附属幼稚園と附属小のダンス学習のあり方を探る研究実践<sup>4)</sup>に取り組んできた。ただし、前者については、期待したような成果を報告するまでには至らなかった。もしこれが、小中連携や一貫教育に取り組む自治体が加速度的に増えている現在であるならば、また違った結果を報告できたであろう。現在も継続中の後者は、小学校のダンス学習の充実には、幼稚園の「創造的芸術体験」が必須であり、中学校のダンス学習の充実には、小学校の「創造的芸術体験」が必須であるという仮説を立て、平成16年度の年長児の「創造的芸術体験」が、附属小や附属中のダンス学習に及ぼす影響を追跡する実践研究である。本研究に通じる、ダンス教育を貫く「柱」(背骨)について探った研究と言える。

昨年(平成23年)の4月に、その年長児がようやく附属中に進学した(本研究が対象とする第1学年の生徒である。)。また、本研究にふさわしいとして選択した教材「暑い国から来たスパイ」は、奇しくも、現在の附属小の第4学年(同じく本研究の対象児童)が、平成19年度に附属幼稚園で取り扱った教材のリメイク版である。

ただし、附属小及び附属中の児童・生徒に占める附属幼稚園からの進学者の割合が、前者は三分の一であり、後者は半数である。本研究では、附属幼稚園からの進学者とそうでない児童・生徒とで活動への参加に違いがあるかについても注目していく。

### 2-2 研究の方法

新事業の取組では、担当する教師と芸術家等とが「協働」で授業づくりを行う。そのためには、“学校で行われていること”に疎いであろう芸術家等に、小学校の「表現運動」及び中学校「ダンス」のそれぞれの指導内容とねらい、さらには「小学校・中学校の円滑な接続」の問題等について理解をしてもらう必要がある。

そこで、次のような手順で研究を進めることにした。

- 1) 「芸術家等がわかりやすい」という視点から、教師のために体系化して示された新学習指導要領の「表現あそび」と「表現」、「創作ダンス」(以下、「表現系のダンス」という。)のねらい等を整理し図示する。
- 2) 同じく、「芸術家等がわかりやすい」という視点から、学習指導要領の解説書に体系化して示された「表現系のダンス」の指導内容とその円滑な接続について整理し図示する。なお、後者については、松本千代栄氏が収集した「舞踊用語の分類」<sup>5)</sup>を活用する。



写真1 芸術家による講話(2011.10.14)

- 3) 文部科学省の新事業について、その趣旨及び実施方法、効果（児童・生徒、教師、アーティスト）等を知り、体育科の「表現運動」及び保健体育科の「ダンス」に位置付ける新事業の「期待される効果」について予想する。さらに、先に整理したねらいと指導内容等とを踏まえたうえで、小学校第4学年の「表現」及び中学校第1学年の「創作ダンス」の授業づくりを行う。
- 4) 新事業を「表現運動」及び「ダンス」に位置付けた授業づくりの効果と成果について、4つの視点（①児童・生徒の自己内省文 ②授業実践で観察された児童・生徒の変化 ③教師の評価 ④講師及びコーディネーターの評価）から分析・考察し、まとめる。

### 3 結果と考察

#### 3-1 新学習指導要領（表現系ダンス）に示された円滑な接続と体系化

文部科学省は、学校段階の接続及び発達段階に応じて指導内容等を整理し、明確に示すことで体系化を図った。そこで、“学校で行なわれていること”に疎いであろう芸術家等のために、新学習指導要領に示された「表現系のダンス」のねらい等を、「技能」「態度」「思考・判断」（中学校は「知識、思考・判断」）の視点から整理し直し、図1に示した。図内の太字は、各発達段階ではじめて登場した文言である。

	小学校1・2年生	小学校3・4年生	小学校5・6年生	中学校1・2年生	中学校3年生
技能	身近な題材の特徴をとらえて全身で踊る。	身近な生活などの題材からその主な特徴をとらえ、対比する動きを組み合わせた繰り返ししたりして踊る。	いろいろな題材から表したいイメージをとらえ、①即興的な表現で踊る。②簡単なひとまとまりの表現で踊る。	多様なテーマから表したいイメージをとらえ、①動きに変化を付けて即興的に表現する。②変化のあるひとまとまりの表現にして踊る。	表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ、個や群で、①緩急強弱のある動きや空間の使い方で変化をつけて即興的に表現する。②簡単な作品にまとめて踊る。
交流				イメージをとらえた表現を通じた交流ができるようにする。	イメージを深めた表現を通じた交流ができるようにする。
態度	運動に進んで取り組む。だれとでも仲よく踊ることができる。	運動に進んで取り組む。だれとでも仲よく練習や発表をすることができる。	運動に進んで取り組む。互いのよさを認め合い助け合って練習や発表ができる。	ダンスに積極的に取り組む。よさを認め合おうとする。分担した役割をはたす。	ダンスに自主的に取り組む。互いの違いや良さを認め合う。自己の責任をはたす。
健康・安全	場の安全に気を付けることができる。	場の安全に気を付けることができる。	場の安全に気を配ることができる。	健康・安全に気を配ることができる。	健康・安全を確保することができる。
知識				ダンスの特性、表現の仕方、関連して高まる体力などを理解する。	ダンスの名称や用語、表現の仕方、体力の高め方、交流や発表の仕方などを理解する。
思考・判断	簡単な踊り方を工夫できる。	自己の能力に適した課題を見つけ、練習や発表の仕方を工夫できる。	自分のグループの課題の解決に向けて、練習や発表の仕方を工夫できる。	課題に応じた取り組み方を工夫できるようにする。	自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

図1 学校段階の接続及び発達の段階に応じて示されたねらい

(出典：小学校学習指導要領体育科 2008、中学校学習指導要領保健体育科 2008、作図：高橋 2012)

## 3-2 学習指導要領解説（表現系のダンス）と舞踊用語

同じく、ダンス学習の指導内容等についても体系化され、「小学校学習指導要領解説体育科編」（文部科学省，2010）と「中学校学習指導要領保健体育科編」（同）に明確に示された。そこで、松本千代栄氏が、「ダンスの学習・指導・研究において、最低限必要と思われるものを収集した舞踊用語」を参考に、「学校で行われていること」に疎いであろう芸術家等のために、各解説書の該当する記述（「技能」と「態度」）の文言を整理・分類し、図2及び図3に示した。なお、複数の発達段階で使われている語句については、初出した発達段階に表示し、カウントの対象とした。

	小学校 1・2年生	小学校 3・4年生	小学校 5・6年生	中学校 1・2年生	中学校 3年生	合計
I 身体に関する用語	1					1
II 基礎的な身体運動に関する用語	6	4	3	8	14	35
III 舞踊運動形成に関する用語	4	2	3	5	9	23
IV 作品形成に関する用語	3	7	5	11	16	32
V 美的原理に関する用語	3	5	1	1	1	11
VI 演出計画・演技に関する用語	2	1	1	6	4	14
合計	19	19	13	31	44	126

図2 発達の段階に応じて体系化された指導内容（表現系のダンス）に使われている舞踊用語  
（出典：小学校学習指導要領解説体育編 2006、中学校学習指導要領解説保健体育編 2008，作図：高橋 2012）

小学校 1・2年生	小学校 3・4年生	小学校 5・6年生	中学校 1・2年生	中学校 3年生
I 全身 II ねじる 走る 這う 回る 跳ぶ 踊る III 高い —低い 素早い 急変 続ける IV 題材 お話し 即興 V 変化 様子 特徴 VI 場面 なりきる (19語)	II 転がる 動く—止る 対極の動き 感じ III 大きく —小さく 速く—遅く IV 表現 イメージ 空想の世界 ひと流の動き はじめと おわり 繰り返す つなげる V 多様な 誇張 対比 対応 VI 感じを込める (19語)	II 集まる —離れる 固まる 激しい III 急に 起伏 自由に動く IV ひとまとまり の動き 組み合わせ はじめ—なか —おわり 群 グループ V 強調 VI 通して踊る (13語)	II 走る—跳ぶ —転がる 伸びる—縮む 集まる—跳び散る 静と動 軽快な やわらかい 鋭い ダイナミック III 空間 密集—分散 スローモーション 緩急強弱 めりはり 連想 まね 見立て テーマ 構成 盛り上がり 展開 転換 仲間とかかわる 見せ合い 発表 連続 VI 場 小道具 音響 練習発表会 (31語)	II のぼる 座る 隠れる 横たわる 運ぶ すれ違う 振りほどく くつつく —離れる ねじる—回る —見る 静かな 落ち着いた 重々しい 力強い 日常動作 III 列 円 中心 ぎりぎり 視線 大回り —小回り ゆっくり 動きをずらす 力をためる IV コミュニケーション 伝わる 創る 作品 抽象的 アイデア 主要場面 はこび ストーリー 物語 序破急 起床転結 まとめる 踊り込む 個人—集団 ユニゾン —ばらばら の動き V 対照 VI 主役—脇役 運営 役 交流会 (44語)

図3 発達段階に応じて体系化された指導内容（舞踊用語）

（出典：小学校学習指導要領解説体育編 2006、中学校学習指導要領解説保健体育編 2008，作図：高橋 2012）

### 3-3 文部省「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」

#### 3-3-1 新事業の趣旨

文部科学省は、平成22年5月、文部科学副大臣の主催による「コミュニケーション教育推進会議」を設置し、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及のあり方について議論を開始した。そして約1年2ヶ月にわたり議論を重ねた結果を、「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために（仮題）」（文部科学省、2011）にまとめ報告した。

またこれと連動して、文部科学省は、平成22年度、全国45都道府県、292校の小学校、中・高等学校等で、芸術家による表現手法を用いて「児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図る」取組を実施した。これが、平成23年度に附属小と附属中が取り組んだ新事業である。新事業の趣旨は、ア) 全国の小学校、中学校・高等学校等のうち、応募申請に基づき選定した開催校に対して イ) NPO法人や劇場等に所属する芸術家等を派遣し ウ) 開催校の担当教師と芸術家等が連携を図り エ) 児童生徒を対象に オ) 芸術のもつ表現手法を用いた集団による創作過程を含む、計画的・継続的なワークショップ等の実技指導の実施を通じて児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図る、である。

また、新事業の特色の一つに、「グループ単位（小集団）で協働して、正解のない課題に創造的・創作的に取り組む活動を中心とするワークショップ型の手法をとること」（前掲、2011）がある。これと同じ学習活動が小学校の「表現」で、また中・高等学校の「創作ダンス」で行われてきたことは、小学校の教師や保健体育科教師の誰もが知るところであろう。しかし、近年の教育現場における「表現」や「創作ダンス」離れの実態からもわかるように、「正解のない課題に創造的・創作的に取り組む」授業づくりは難しい。開催校の担当教師と芸術家等がどのように連携を図るか（前述）で、新事業の効果が左右されると考える。

#### 3-3-2 実施方法

##### 1) 実施方法

【派遣分野】 演劇、ダンス・舞踊、伝統芸能、大衆芸能、文学、メディア芸術、音楽、美術

【実施回数】 ワークショップ等の実技指導の実施回数は、1校当たり3回以上12回以内。但し、同一の児童生徒に対して3回以上の指導が実施されること。

【講師】 1回当たりの講師は原則1名。補助者は最大5名まで。但し、学級やグループ単位などに分かれて実施する場合は、必要に応じ、講師は最大5名まで、補助者は最大25名まで。

【開催会場】 原則、開催校の施設（教室、体育館等）。

##### 2) 平成23年度の事業のポイント

2年目となる今年度は、学校から「Ⅰ 直接申請する実施方法」（学校申請）と、「Ⅱ コーディネーターを活用した実施方法」（団体申請）により、より効果的・多面的な事業展開が図られた。ただし、前者は、申請校数が増えたにもかかわらず、総採択校数は100校近く減少しており、採択率は19.2%である（図4参照）。前年度と事業の総額に変更はない。また、前者の開催校数を削って後者を設定したメリットとして、学校のニーズに応じた芸術家派遣や、地域を拠点とした重点的な事業展開、コーディネーターによる書類作成などの学校の事務負担軽減、等が示された。しかし採択された委託団体の地域は、政令都市を含む12都道府県であり、本県

からも複数の団体が申請したが不採択となった。新事業の普及を考えるならば、各県・地域に委託団体を1つは採択するといった、さらなる改善が求められるところである。

学校種	学校申請分					団体申請分	合計
	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	その他		
22年度	177校	55校	36校	23校	—	—	292校
23年度	55校	10校	14校	4校	1校	89校	172校

図4 文部科学省新事業の採択状況  
(出典：「コミュニケーション教育普及協議会関係資料」文部科学省，2011)

### 3) 新事業の留意事項と実際

新事業には次のような留意事項が明記されている。

- ・教育課程上の授業時間に位置付けて実施しなければならない。これは部活動や放課後の教育課程外の時間では実施できないということである。
- ・外部講師に任せきりで、授業との連動性がない取組にならないよう、指導計画にきちんと位置付け、児童生徒の実態と乖離しないよう芸術家と担当教師とが連携を図らなければならない。
- ・児童生徒の参加型、双方向の授業形式を工夫しなければならない。

昨年度の分野別の状況をみると、すでに教科(領域)に位置付いてきたダンスではなく、未だ学校教育に位置付いていない演劇が独走している状況である。例えば、初年度は48.6%であった演劇の取組が、今年度は27ポイントもアップした(75.9%)。それに対しダンスの取組は、初年度(4.8%)から半減し、今年度の開催校はわずか2校(附属小と附属中)のみである。数字を見る限りでは、当初の「演劇とダンスに特化した事業」が、実際は「演劇に特化した事業」と言ってよい程の差である。ただし、これは学校申請分の実態であり、今年度から募集が始まった団体申請分では、演劇には及ばないものの、ダンス分野も健闘している。今年度は16の団体が委託団体となったが、その内、取り扱う分野にダンスを含めて申請している団体数は11である。

その一方、初年度の応募要項では、演劇、ダンス・舞踊、伝統芸能、大衆芸能であった分野が、平成23年度のそれでは、文学、メディア芸術、音楽、美術などが追加された。多様な芸術分野での実施が可能になったが、同類の文化庁の事業等との違いがなくなり、上演芸術に限った事業のオリジナル性が薄れた。ダンス関係者としては残念に思うとともに、追加された芸術分野で新事業の特色が活かされるか危惧している。

なお、昨年度の教科別状況は、実施のトップが総合的な学習の時間(131校)であり、それに次いで音楽科(70校)、国語科(41校)、特別活動(38校)、図画工作科・美術科(18校)、そして体育科(9校)の順となっており、総合的な学習の時間や国語科で演劇を取り上げた開催校が多かったということである。

#### 3-3-2 芸術家とのかかわりから生まれるもの(児童、教師への効果)

昨年度の実践校のアンケート結果(前掲)によれば、新事業を実践したことによって認められた子どもたちへの効果は、ア)他者認識、自己認識の力の向上(「受け入れる力」の向上)

イ)「伝える力」の向上 ウ)自己肯定感と自信の醸成 エ)学習環境の改善, 等である。  
 ア)は, 創造的・創作的な活動や, 協働で話し合いながら正解のない課題に取り組むことによる効果である。イ)は, 言葉による表現に加え, 身体表現を用いて相互に伝え合うことによる効果であり, ウ)は, 通常での学校生活では教師が見いだしにくい子どものよい面や優れた面が外部の大人(芸術家)によって引き出される効果である。エ)は, ア)～ウ)の質的向上や醸成による効果である。ただし, 新事業の効果はこれだけではない。報告書(前掲)では, 教師への効果についても, 次のように述べている。

芸術家等の表現活動の専門家は, 子どもたちのグループ活動において, 他者認識や自己認識を助け, コミュニケーションを促進させたり(ファシリテーターとしての専門家), 非言語コミュニケーションや即興的に対応したり(クリエイターとしての専門家)することに長けている。芸術家等の表現活動の専門家は, このような特有の技能を用いて子どもたちの主体性や他者との関係性の構築を重視したワークショップ型の授業を実施することで, 子どもたちの気付きや発案を誘引し, 潜在的な能力や学習意欲を引き出すことが多い。このことは教師にとって, 通常の授業手法や評価方法を見直し, 改善する機会となるのである(前掲, p.10)

また報告書では, 「コミュニケーション能力の育成をわずか数回の授業でのみ達成できると考えるのではなく, これらの取組と言語活動を含めた各教科等における指導とを有機的に関連させながら実施していくことが必要である」と結んでいる。

### 3-4 宮崎大学教育文化学部附属小学校の授業づくり

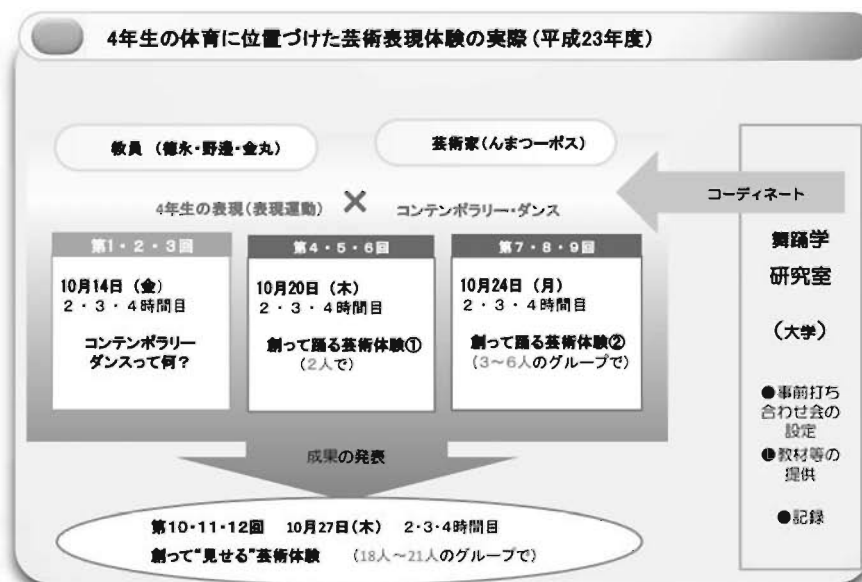


図5 平成23年度児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験  
 (開催校:宮崎大学教育文化学部附属小学校, 作図:高橋 2011)

4年生3クラスの児童を対象に、その3分の1（附属幼稚園からの進学者ではない児童）には上演・鑑賞体験（於：附属幼稚園）がないことに考慮し、1クラス4回、計12回の授業づくり（図5参照）を行った。取り扱った教材は、「Jump」（第1・2・3回）、「スパイ」（第4・5・6回）、「夜の動物園」（第7・8・9回）である。これらの教材及び活動の導入教材は、舞踊学研究室が、ダンスの指導が苦手な教師のために開発した「気がつきゃ、ほら！ダンス」シリーズのコンテンツであり、県内の研修会等で紹介してきたものである。

毎時間の活動を、小作品（コンテンポラリー・ダンス）を披露する実演披露と、講話（内容はダンスの魅力について）と実技指導とで構成し、各クラスの最終回（第10・11・12回）は、会場（附属小体育館）にリノリウムマットを敷き、簡単な照明機材をセットしたミニ鑑賞会（成果発表会）を設定した。講師となる芸術家（んまつーボス：児玉孝文）と実技補助者2名（豊福彬文・宗彩乃）が演示と指導を行い、毎時間及び単元の活動のマネージメントと評価については教師の役割とした。毎時間の観察と記録は、舞踊学研究室の役割とし、記録した活動の様子は、んまつーボスのブログに当日中にアップし、広く事業の成果の周知を図った。

### 3-4-1 児童への効果

#### 1) 事後アンケートの集計から探る児童への効果

事業終了後に、4年生111人を対象に、質問紙を用いたアンケート調査（作成は文部科学省）を実施した。そして、子どもたちの回答を、「芸術家等」にかかわる記述、「芸術表現体験」にかかわる記述、「コミュニケーション（能力）」にかかわる記述、の3つに分類した。ただし、これらは、くっきりと分けることができるものではないことから、その分類を、担任教師として日々子どもと接している振付家の野邊が担当した。

Q1 「今回、芸術家の先生による体験を中心とした授業がありました。このような授業の時間を受けてみて、あなたはどう思いましたか。」（一番そう思える番号をそれぞれ一つ選択）

	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそ う思わない	どちらとも 言えない	無回答
①芸術家の先生に教えてもらえて、その時間がおもしろかった	102	8	1			
②声を出したり、体をつかたりしながら自分の気持ちなどを表すことが楽しかった	96	15				
③いつもとは違うみんなのようすを見つけることができよかった	75	28	4		3	1
④みんなと力を合わせたて取り組むことが楽しかった	91	17	1			2
⑤自分からすすんで周りの人に話しかけるようになった	62	23	12	3		1

図6 児童への効果（作図：野邊 2011）

Q2 「今回のような時間をまた受けてみたいと思いますか。（当てはまる番号一つ選択）

1. 受けてみたい・・・ 106
2. 受けたくない・・・ 1
3. どちらとも言えない・・・ 3
4. 無回答・・・ 1



Q2-1 どうして思いましたか。

「受けてみたい」を選択した児童の理由（抜粋）

【芸術家（んまつーぼす）にかかわる記述】

説明が分かりやすかったから。 見ていて楽しいダンスをおどってくれたから。 勉強になったから。 いろんなことが上手くできたから。 いろんなことにチャレンジすることができたから。 ちがう先生から授業をうけると、緊張もあつたり、楽しみもあつたりで、いい経験だから。芸術家に教えてもらえてうれしかったから。芸術家の先生に教えてもらおうと、わくわくして楽しいから。 もっといろんなダンスのしかたを教えてほしいから。 もっとダンスや表現がうまくなりたいから。

【芸術表現体験（「表現」）にかかわる記述】

体を使って自分の気持ちを表すことに感心したから。 こんな楽しいコンテンポラリー・ダンスは、もっとやりたいから。 終わるのがいやになつたし、いつのまにか笑顔になれたから。 4時間だけじゃ足りないから。 もっとダンスを踊りたいから。 またライトに照らされてみんなももっとおどってみたいから。 今までの体育の授業の中で一番楽しかったから。 とにかく楽しかったから。 楽に楽しくできておもしろかった。 みんなとできて・・・楽しかったから。 音楽に合わせて踊ったらすごくおもしろかったから。 自分一人で自由なダンスがおどれるから。 自由にあっちこち行けるから。 波乱万丈に動いたり、複雑な動きをやったりしたから（特に2回目）。 動物を表現することができたから。 みんながこよかったから。 みんなが笑顔だったから。 いつもとちがうみんなが見たいから。 発見する力や体力がつくから。 ふつうの体育よりも体を使ったから。 ダンスがけっこう好きだから。

【コミュニケーション（能力）にかかわる記述】

人の気持ちがわかるし、自分の気持ちも自由に表現できるから。 コミュニケーションをとりながらやったので、またやりたい。 みんなとふれあいながら、楽しくできると思うから。 とても楽しくて、友だちと協力することもできるから。 みんなと交流した時間が楽しかったから。 いろいろな友だちとかわりあえたから。 みんなと力を合わせて取り組みたいから。 相手のことをもっと知りたいから。

「受けたくない」と回答した児童（1名）の理由・・・初対面の子どもにさせるのはちょっと気まずいと思ったから

「どちらとも言えない」と回答した児童（3名） ※理由の記述なし

Q3 今回のような時間を受けてみて、あなたが感じたことや思い出に残ったことなどを自由に書いてください。

【芸術家（んまつーぼす）にかかわる記述】

ぼくはあんなふうな自由なダンサーがいることをはじめて知りました。 こんなダンスもあるんだなーと思った。 こんなに授業は楽しくて喜びがあるものなんだと思いました。 先生方のダンスがとてもかっこよくて、毎回次の日の夢に出てきました。 芸術家の先生のダンスを見ることができてよかった。 次は舞台をみたくなった。「風景の中の少年」がすごい技を連発して楽しかった。「んまつーぼす」が来てくれて、体育が楽しみになりました。 芸術家の先生が上手に表現したり、高くジャンプをしたりすごく思い出に残った。 プロの授業をうけてダンスがすごくすきになった。 先生たちのすばらしい動きやアドバイスを参考にになりました。「せーの」や「1・2・3」を言わずに、相手の動きを見てお

どるのが、す、す、すごい。 誉められた。たくさんアドバイスをしてくれた。 きびしかった。

#### 【芸術表現体験にかかわる記述】

自分で考えたことを表すのが楽しかった。 みんなとちがうことをすること。 この授業を受けて、個性を持ち、体を動かすことはとても大切ということが分かった。 スパイの時に工夫したオリジナルが楽しかった。 ダンスがこんなに楽しい(おもしろい)ものなのかと思いました。 おもいきり体を動かすことができ、おどりで表現することが楽しかった。 いろいろなものを体で表現できた。 むずかしいポーズやおどりをして楽しかった。「夜の動物園」というので、動物の気持ちを考えると演技がうまくなった。 できないこともあったけど楽しくできてよかった。 完ぺきなダンスをしなくても、ダンスになること。 発表会「夜の動物園」で、練習でできなかった「いも虫」ができた。スパイになりきってやるダンスで、サングラスをかけながらおどるのが楽しかった。 少しだけおどりがうまくなった。 みんなの様子が楽しかった。 みんなが笑顔でおどっていた。 4回目の授業で「んまつーポーズ」とみんなで楽しく踊れて最高の時間だった。 最後にみんなでおどったことが思い出に残りました。 発表会がよかった。 最後の授業で、ステージを創ったり、ライトを使ったこと。 もう一度このようなダンスをしてみたい。

#### 【コミュニケーション(能力)にかかわる記述】

友だちと話すアイディアが浮かんで楽しかった。 とても楽しく、前より信頼関係が深まった。 みんなと力を合わせて楽しくおどるのは大切だなと思った。 みんなと協力して(力を合わせて)取り組むことができた。 他の子とコミュニケーションがとれてよかった。 友達となかよくなれたけれど、コミュニケーションをとるのはむずかしかったです。 はずかしかったけど、あとから慣れて、はずかしい思いがなくなり、楽しくできた。 最後にいろんな人に見られた時、どきどきした。 これからももっといろいろな人と楽しんでいきたい。

### 3-4-2 教師への効果

各時間の教師に対し、授業の最後に、毎時間の活動及び児童の様子についての講評及びその提出を課した。そして、それらを参考に芸術家とコーディネーター(舞踊学研究室)とで振り返りを行い、次時の授業づくりに反映させるようにした。面白いことに、各教師の初回の感想を比べると、教師(の専門科目)により、記述量に違いが見られた(図7参照)。これは、各教師の「表現運動」に対する関心の表れである。そこで、4回の各教師の感想の記述量(文字数)を単純に比較したところ、図画・工作科の教師Kの語数が回を重ねるごと増えていた(図8参照)。一般的に、記述量が増えると言うことは、書きたいことが増えたということである。そして、書きたいことが増えるということは、見えたり・気付いたりしたことが増えるということである。実際、教師Kは、それまでは見えていなかったことが、徐々に見える・気付くようになったのであろう。それとは対照的に、理科の教師Tの語数に変化は見られない。その違いは、教師の専門教科の特性に因ると思われる。

**教員の感想 (第1回・第2回・第3回)**

<p><b>K教員 (図画工作)</b></p> <p>★初めて見るダンサーの動きに子どもたちは圧倒されていた。特に、ジャンプの高さ、回転の速さ、美しさには驚かされていた。活動では、子どもたちは大変楽しそうに取り組んでいた。ジャンプする際も、いろいろな動きを取り入れながらの活動であった。</p>	<p><b>N教員 (体育) ※舞踊教育</b></p> <p>★未知なるものとの遭遇の多き一時間だった。未知なる言葉、未知なる人たち、未知なる身体の動き。しかし、子どもたちは「振付家」「ダンサー」「アーティスト」「んまつーボス」などのあらゆる新語を、自分たちの言葉にしていく。そして、あたかも経験したことがあるかのように、アーティストと鷹を、雰囲気を共有し、身体の動きをアーティストチックに変化させていく。まさに、言葉よりも伝わることもあるノンバーバルコミュニケーションだ。この一時間で、子どもたちが最も食らいついた新語「コンテンポラリーダンス」。他教科の授業でも使われ初めた子どもたちは、「自分もアーティスト」と嬉しい勘違いをし始めたのかもしれない。</p>
<p><b>T教員 (理科)</b></p> <p>★初めて間近で見るフロダンサーの動きに感動し、自分たちも「あんな風に表現したい」という意欲を高めていた。それぞれに活動するときには、まだ一人で踊ることに抵抗を感じている子どもの姿も見られた。</p>	

図7 教師の感想 (第1回・第2回・第3回) (作図：高橋 2011)

★教師の感想における語数の変化

	1時間目→	2時間目→	3時間目→	4時間目
T教員 (理科)	93	90	91	88
K教員 (図画工作)	114	120	160	206
N教員 (体育)	409	299	269	312

※ 数字は語数

図8 教師の感想における語数の変化 (作図：高橋 2011)

### 3-4-3 講師（芸術家）及びコーディネーターの感想

事業後に提出された芸術家及びコーディネーターの感想を図9にまとめた。

芸術家とコーディネーターの感想	
んまっポーズの感想	コーディネーター（大学）の感想
<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 教科「体育」のねらいを意識し、十分な運動量を確保するようにした。</li> <li>☆ 領域「表現運動」のねらいを意識し、子どもたちの身近なものを題材にするようにした。</li> <li>☆ どのクラスの教員も協力的で、グループ分け等スムーズにできた。</li> <li>☆ 1回の時間（45分）が短い。正味1時間あるとグループ創作にゆとりができる。</li> <li>☆ 同一対象児童と少なくとも6回できると、おもしろいことができる。</li> <li>★ 実施日の変更について、わかった時点ですぐに連絡をしてほしかった。</li> <li>★ 事前の打ち合わせをしっかりとらしたかった。</li> <li>★ 本事業の実施について、関係者以外の教員に対して情報も流してほしかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ 教員が多忙すぎて、芸術家との事前打合せがしっかりとできなかった。</li> <li>★ 各回の間に10分の休憩があっても、先の回の後始末と次の回の準備で、実際には休憩をとれなかった。</li> <li>★ 芸術家の接待や飲料等、開催校が用意するのか、コーディネーターが用意するのか、芸術家の特典するのかな等、打ち合わせの必要を感じた。</li> <li>★ 体育館使用についての調整は、開催校側が責任をもってしてほしい。</li> <li>★ 次回は、申請時に応募校としっかりと打ち合わせることで、消耗品（紙類、教具、小道具）や機材借用料等の経費を開催校から請求するようにしたい。今回は芸術家が負担した。</li> </ul>

図9 芸術家及びコーディネーターの感想（作図：高橋 2011）

## 3-5 附属中学校の授業づくり

### 3-5-1 授業づくりのポイント

「円滑な接続」を意識して、附属小の取組と同じ教材を使用した授業づくりを行った。

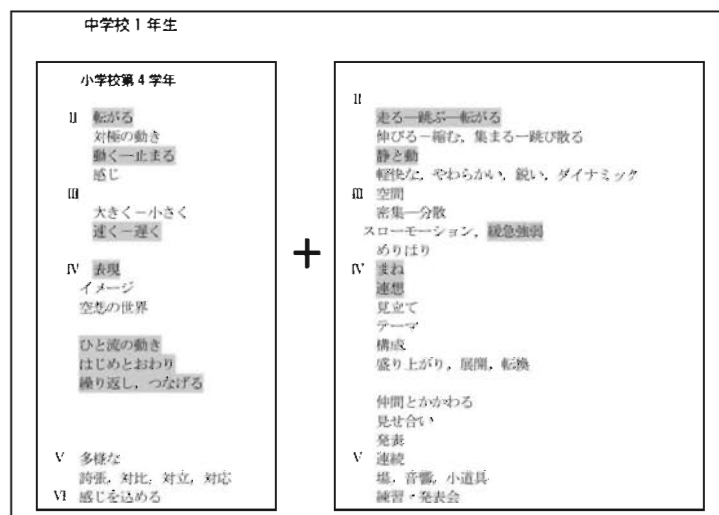


図10 中学校第1学年の指導内容（舞踊用語）（作図：高橋 2012）

その際に、特に各教材の実技指導については、事前に作成した図3「発達の段階に応じて体系化された指導内容（舞踊用語）」及び図8「中学校第1学年の指導内容（舞踊用語）」を参考に、第4学年との違いが明らかになるような授業づくりを行った（図10参照）。

### 3-5-2 活動の内容

対象生徒の半数（公立小学校からの進学者）に、上演・鑑賞体験（於：附属幼稚園）がないことを考慮し、以下のような活動計画を作成した。

活動名：「こんにちはコンテンポラリー・ダンス」

担当者：外薮武志（宮崎大学教育文化学部附属中学校教諭）

授業者：若松宏治（同講師）

実施期間：2012年1月10日（火）～31日（火） 全12回

実施場所：宮崎大学教育文化学部附属中学校体育館

実施対象：第1学年 160名 4クラス

実施内容：県内外で活躍している振付家・アーティストを講師に招き、講話を行うとともに、実演披露・実技指導を実施する。講師は、県内外で活動する児玉孝文（振付家・ダンサー）に依頼し、同じく振付家・ダンサーの豊福彬文と宗彩乃には実演披露・実技指導の補助を依頼する。記録（撮影数力）は舞踊学研究室の学生に依頼する。

実施方法：各クラス 50分×3回。打ち合わせは事前に1回行う。

第1回 A・Cクラス (1/10) B・Dクラス (1/12)	第2回 A・Cクラス (1/24) B・Dクラス (1/25)	第3回 A・Cクラス (1/30) B・Dクラス (1/31)
①自己紹介。スポーツとダンスのそれぞれの魅力の違いについて、中学生が興味・関心を持つような例を混ぜて講話してもらう。(10分) ②芸術家による実演披露 (10分) ③芸術家と一緒にダンスを踊って楽しむ(25分) ④教師による講評 (5分)	①芸術家による実演披露 (5分) ②芸術家の指導で、ダンスを創って踊って楽しむ (25分) ③半数ずつの見せ合い。(10分) ④感想を出し合う芸術家と教師による講評 (10分)	①芸術家の指導で、グループごとに小作品をつくる (25分) ②グループごとに小作品を発表し合う。感想の出し合い、芸術家による講評 (10分) ③芸術家による実演披露及び質疑応答 (10分) ④教師によるまとめ (5分)

図11 中学校第1学年の活動計画及び内容（作図：高橋 2011）

### 3-5-3 生徒への効果及び教師の感想

附属中の「ダンス」は、保健体育科の年間計画の1月に位置付き、本研究のためにその時期をずらすことは難しい。現時点（平成24年1月11日）では、各クラスのそれぞれ第1回が終了したところである。したがって、生徒の感想と教師の感想に代えてコーディネーターの観察記録を記す。

第1回（Aクラス）。初回と言うことで、生徒も芸術家も互いに様子を伺うようなシーンが見られた。附属小の4年生との違いを出すために、講話の時間を長めに設定したが、予想したような生徒の興味・関心の高まりは見られなかった。女子は女子、男子は男子で固まり、ひとりで動く生徒は少なかった。また、授業者が事前の打ち合わせ会に出席していなかったこともあり、授業者と芸術家との協働する姿は見られなかった。同じく直前に打合せ会を設定したことで、事前に芸術家の紹介ビデオを生徒に見せる時間的な余裕がなかっ

た。そうしたことが影響してか、朝の会でビデオ鑑賞をした附属小との違いを感じた導入であった。

第2回（Cクラス）同日。第1回の終了後に振り返りを行い、講話の前に、本活動につながるようなダンスウォーミングアップを入れることにした。また、講話を短くし、芸術家の実演披露を授業の最後に移した。さらに、体育館をネットで半分に仕切り、男女が混在できるような場づくりをした。そして、活動の中で、空いている空間を自分で見付けて動くように繰り返し指示をするようにした。その結果、Aクラスに比べると、積極的に活動に参加する生徒（特に女子）が増えた。

第3回（Bクラス）第2回との間に1日を置いたことで、芸術家や活動内容についての情報が生徒間に届いている感じを受けた。活動の流し方は第2回と同じ。自分で考えて動くという活動のねらいを理解して動く生徒と、それができずに人の後をついて動くだけの生徒とに分かれた。実技指導に予想した以上に時間がかかり、実演披露は省略した。短縮授業であった第1回及び第2回に比べると、逆に正規の時間に安心してか、時間配分を間違えたようであった。授業者の講評は、講話の内容に沿ったものであった。

第4回（Dクラス）前時のクラスに合わせて実演披露を省いた。講師の「これは、正解のない課題を自分で解決する活動であり、自分がすることが正解になる」の説明で、ひとりで活動する生徒が一気に増加した。このクラスだけ時間が余ったこともあり、実技補助者のリードで簡単なリズムダンスを行った。楽しそうに踊ってはいたが、次時の活動を考えると、やはり実演披露をするべきであったかもしれない。授業後に、芸術家からも、「正解のない課題を創造的・創作的に解決する」新事業に、リズムダンスはふさわしくないのではないかといった疑問が出された。

全体（第1回～第4回）を通して、各クラス初回と言うこともあり、芸術家からの一方通行の指示が多くなっていた。また、時間の関係でグループの活動を入れることができず、個の活動がメインとなっていた。授業時間内に納めることを優先してメインとなる実演披露を省いてしまっただけでは、芸術家を派遣した意味がなくなる。1回を何分に設定するか等、発達の段階による違いを考慮したカリキュラムについての検討が課題である。

#### 4 まとめ

「小学校・中学校の円滑な接続」の必要性は「表現運動」に限ったことではないが、「国際化の進展に伴い、多様な価値観を持つ人々と協力・協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成すること」（新学習指導要領）の中で、中学校「ダンス」の必修化を捉えるならば、小学校の教師も「表現リズム遊び」や「表現運動」に対する苦手意識やめんどろといった考え方を変えてもよい時期である。

ただし、前述したように、小学校の「表現運動」という積み木の上に中学校の「ダンス」という積み木を乗せれば「円滑な接続」ができるというわけではなく、「表現運動」と「ダンス」をつなぐ背骨がなければ、乗せた積み木はぐらつく。それではどんな「背骨」があれば、乗せた積み木はぐらつかないのか。これまでの研究実践を通して、「創造的芸術体験」（「表現」と「創作ダンス」）がその「背骨」にふさわしそうだということは報告してきた。しかし、60

余年も小学校の体育科の必修領域でありながら、今に至るまで必修のような取り扱いがなされてこなかったと言うことは、学校や小学校の教師にとって、「表現」は、ぜひとも取り組みたくなるような魅力的な学習ではなかったと言うことになる。そうした「表現運動」や「表現」に対する小学校教師の脱学習を図り、必修化となる中学校「ダンス」と連携させた「表現運動」に向かわせるためには、「創造的芸術体験」に代わる新たなアプローチが必要であった。そうした中で、「コミュニケーション教育に資する」文部科学省の新事業がはじまった。しかし、「コミュニケーション教育」については、その必要性和重要性を認める教師は多いが、やはり新事業の「芸術表現体験」がネックとなっており、またそれを小学校の「表現運動」や中学校の「ダンス」と結び付けて捉える教員も少なかった。

今回、本研究が示した附属小の取組の子どもへの効果や、教師への効果は、前述のような小学校教師や学校の脱学習を図るに十分な成果であると言える。また、今回の学習指導要領の改訂で体系化されて示された指導内容についても、今回、舞踊用語としてそれを見ることで、よりわかりやすく示すことができた。さらに、今回の事例研究のように、小学校と中学校が同じ教材を使うことで、中学校では小学校で取り扱った教材をより深く学ぶような方法もあることを示すことができた。

以上が、本研究の成果である。

なお、初めての取組ということで、担当教師と芸術家との打合せが十分にできなかった。それにより少なからず効果が半減したことは否めない。また、こうした取組とその成果を、開催校（附属小の場合は実施学年）だけの成果に留め置かず広く公開していくような意識も必要であった。しかし、実施校の他の教師も知らないといった実態や、授業の参観者の少なさに、それこそが小学校や小学校教師の「表現運動」に対する関心の低さであることに改めて気づかされた実践であった。またそれは、誰もが必要だと考える「コミュニケーション教育」に頼らざるを得ないダンス学習の実態とも言える。「小学校・中学校の円滑な接続」が注目されている今、そうした状況が少しでも改善することを期待したい。

## 参考・引用文献

- 1 「小学校教育と中学校教育を貫く背骨、心柱をそのように設定していくかである」（児嶋邦宏、2010）の「教育」を「ダンス学習」に置き換えて、筆者が作文した。児嶋邦宏、小・中学校連携の課題と今後の期待、初等教育研究資料、文部科学省、865号、2010.10
- 2 平成10年の教育課程審議会答申で異校種の接続や連携が求められた。
- 3 文部科学省の指定研究。各教科の基礎・基本の重視が優先される中で、3年間に限った実験研究で終わった。それまでは体育の一領域であった表現運動としては、芸術教科として認知される好機と捉え、積極的に授業づくりに参加し、その可能性を探った。奥村江利子・高橋るみ子、初等教育における表現科についての一考察～表現運動からのアプローチ、日本スポーツ教育学会第24回大会（北海道）、2004
- 4 附属学校園との7年間の共同研究については、「幼稚園から中学校までの一貫性のある豊かなダンスの学習—中学校ダンスの必須化に向けて」（高橋るみ子・野邊社平他、宮崎大学教育文化学部附属教育実践同好センター研究紀要、18号、2010、3）にまとめている。
- 5 今年度の新事業へ申請するために、主に平成22年度の附属幼稚園との協働について、「身体表現などを通じたコミュニケーション能力の育成～かかわる力を高めるために～いつ・何を・どう体験さ

せるべきか〜」(高橋るみ子, 福島裕子, 他, 平成22年度学部附属共同研究報告, 宮崎大学教育文化学部附属教育実践同号センター研究紀要, 19号, 2011. 3) にまとめている。

- 6 松本氏は, 収集した総語数(562)を, I(61), II(150), III(94), IV(81), V(39), VI(70), VII(67)に分類示した。特にVIIは, 学習・指導に関する一般的な用語を舞踊学習の側面から選んだ用語となっている。(松本千代栄, ダンス表現学習指導全書, 大修館書店, 1980)



2011.10.27 第4回目 宮崎大学教育文化学部附属小学校

平成23年度「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」  
(次代を担う子どもの文化芸術体験事業)

日時 2011.10.27

講師 児玉孝文【んまつーポス】

実施校 宮崎大学教育文化学部附属小学校

第4回目